

## 「聞く、聴く、訊く」ということ。

健全な組織においてリーダーは何をしているかといえば「きく」ことです。

「きく」にも段階があつて、聞く=hear、聴く=listen to、訊く=listen with asking (こんな英語があるかどうか分かりませんが、良い質問をしながら聴くという意味です)

私の現役時代から今に至るまでの主な役割は聴くことでした。ところが60歳を過ぎたころから耳鳴りが始まり、難聴が進行していきました。名医という人を訪ねて遠方まで通いました。耳鳴りを我慢できる脳にする治療を受けて、鳴り止まない耳鳴りを気にしないで済むようになりましたが、進行する難聴には苦しんでいます。補聴器、集音器と自分の経済が許される範囲で10種類試みてきました。今は特定してある開発者に直接お世話になりながら「長寿II 首かけ」で一応落ち着いています。アナログで極めて精巧にできていますが、会話で肝心なところが「聞こえない」のです。(落ち込むことが多いです。)

「聞こえない」というのは適当な言葉で、実は間違った表現です。聞こえていても「意味がわからなくなった」という私自身の問題なのです。3語から5語の言葉が抜け落ちることがしばしば起きます。隣に妻がいるときは「今何を言った？」と尋ねて「ああそういうことか」と言って継続してその場の話についていくことができますが、誰もいない、または尋ねることができない場合は、その瞬間から後は話が分からなくなります。(訓練として落語を聞きに行っています。なかなか笑えません。それが笑いです。)

これは集音器のせいではありません。私の聞く能力の低下なのです。この能力の低下を感じる一つは「早い言葉遣い」、スピードについていけないこと。もう一つは、話の設定場面が急に変わると次の話から混乱が始まって先の話まで分からなくなる、「聞き分ける」という力が衰えているという方が適切かも知れません。そんな状態であるからこそ、なんとか正確に聞きたいと集音器のチャンネルをその場に合わせて「聴いています」。私は真剣に聴くときには話し手の表情を見ながら身を乗り出しています。

私のそんな姿を見て同情的なアドバイスを頂くことがあります。一番多いのは「補聴器ではダメなのですか」と言われます。そんな時は、私の集音器が相手に不快感を与えているのだなと感じます。申し訳ないと思いますが、どんな格好であろうと正確に聞きたいのです。

正確に聞き分けないと返答ができない時は、「訊く」ことにしています。話を聞きながら「質問をします」。それによって自分が正しく聴いているかを判断します。不相応な質問をしますと話し手が不審な表情をしてくれますから、素直に謝ります。ともかく色々工夫しながら聴くことに努力をしています。私は耳が遠いですからと言って逃げることはしたくない性格です。そのお陰でまだ社会参加ができています。

幼児が言葉を覚える順序は「聞いて、真似る」ことから始まります。

旧約聖書では「聞け、○○○○よ」という命令形が大事な場面で神様から発せられます。それほど聴くことは大切なことなのです。聴くことを諦めると社会参加ができなくなるリスクは非常に高まります。相手の立場に立つことは元々難しいことですが、難聴に甘んじているとT.P.O即ち場に適応した反応ができなくなり孤独感が強まり、そこから色々な障害が起きてきます。

日本の政治の世界を見ても障害が著しいです。

今中心的に問題になっている安倍派の議員たちは、相手（質問者）の話を聴く力がありませんから、質問に正面から答えることができていません。裏金作りに長けた私と歳が全く同じ議員がTVの取材を受けていました。質問には用意した文章を読むと宣言して読み上げました。安倍派の議員は申しあわせて同じ答えをする。記者の声を聞いていない。

そればかりでなく、記者を馬鹿呼ばわりして「頭悪いね」と言う。あまりにも品格がなさすぎる。この老人議員は過去に国会質問で時間を持て余し般若心経を読み上げ、その醜態は海外にも報道されたという。歳をとると自分が答えられないことに直面すると暴言を吐く人が多くなります。

5人組も同じ回答しかできない。彼らに良心があるのだろうか疑問に思う。

クリーンとされ多少の良識があると認められた元オリンピック担当大臣も安倍派に属したために政治家にとってはポケットマネーの金額で良心を売ってしまったようです。可哀想に。安倍派の文化に染まると虚偽の証言を平気でするようになるようです。

組織には村度がつきものですが、派閥ではそれが著しく激しいようで、トップの顔色を見るのが仕事で国民のための政治は二の次三の次果ては忘却の彼方で大臣の椅子を狙うことが本業となっています。

朝日新聞の12月5日朝刊にこんな川柳がありました。

（国葬で送った人に）「バシちまいましたと墓前にご報告」（茨城県の方）

6日には「なりたいな『差し控える』ですむ身分」（神奈川県の方）

7日には「清和とはとても名乗れなぬ裏事情」（東京都の方）

12日「おごれる安倍派は久しからず」——。年の瀬の永田町には諸行無常の鐘が響き渡っている。

今回の裏金問題がどこまで真相に及ぶか分かりませんが安倍さんが残した遺産がまた一つ明かになりました。もう一つは統一教会と自民党の関係が少し解明されたことでしょう。

アベノマスクより価値あるものを残してくれました。

倫理観を奪われた子分たちはどのようにして立ち直るのでしょうか？

岸田首相に全て罪を負ってもらって解散総選挙という彼らの「清め的手段」も考えられているようですが、検察がどこまで頑張れるか注目したい事案です。

このような国会を見ながら私たちは何を学ばいいのでしょうか？

企業組織から見るとトップの姿勢が文化を作りその組織の精神的雰囲気醸成することを再確認できます。付度も度を超すと最後は自分の命取りになること。正しい良心を根幹とした理念がないリーダーの組織はいずれその報酬を受けることになる。

政治家が良心を取り戻すためには何か手立てがあるのでしょうか？

今のままでは、どんなに裏金を作る政党であっても、選挙をすれば多数をとることになる。人の噂は75日というのが政治家の世界だとすれば、この裏金問題も75日で精算されてしまいます。若い人の投票率が低いからこんな結果になるという意見が多数ありますが、例え彼らが投票しても今の制度では結果は変わらないと私は思います。

手短にできること、細々とした希望が持てることは純粋な野党の議員数を3分の1以上にすること。次には小選挙区制（お金がある人が有利、世襲が有利、使命感に萌える若い人が立候補しにくい）を中選挙区制に戻すことですが、これは閣議決定されるので政権を取らねければ実現は難しいようです。そんな中でも、国民の声がもっと政治に反映できる仕組みを考えていかなければならないのです。何もしなければ今の延長は続くでしょう。少子化は進み、医療・福祉の軽視が進むと結局は高齢者福祉の担い手はいなくなり、格差はさらに激しくなり、行き場のない人々が増えてしまいます。

政治家の資質を向上させるにはどうしたらいいのでしょうか？少なくとも品格の資質テストをAIに依頼してみてもどうでしょうか？

国民の声を聞く力のある人、聴く力のある人、訊く力のある人をどうしたら国会に送ることができるのでしょうか？ 無駄のように見えますが。

やっぱり、みんなで考えましょう。忍耐して遠いどこかに希望を見出したいです。

## あんぱん・トマト・300円

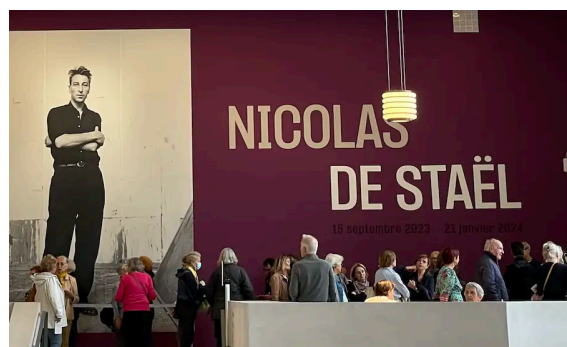
この一年市民が苦しんだのは物価高、子供さんを育てられている家庭は相当の打撃ではないかと心配する。私はあんぱんが好きで体調のいい時はコーヒーと共に求める。その価格が110円から150円、180円、200円となり伊丹空港では300円であった。安いものを求めて歩いて88円を発見して喜んで買った。後悔した。値段はかなり正直であった。150円で辛抱している。大好きなトマトには驚いた。10月頃には小さなあんぱんくらいの大きさが300円、400円と値札が付いている。妻は買えないからしばらくは缶詰のトマトで我慢して欲しいという。誰が買うのかと思う。しかし、格差は一段と激しくなっている。海外旅行に至っては私はビジネスクラス60万円を目標にヨーロッパをしばしば訪問した。今、調べて驚いたことは150万円が相場となっている。最早高嶺の花である。

# パリ通信・第144号

## ニコラ・ド・スタール回顧展

今秋のフランスは本当によく雨が降る。10月と11月の降雨量は過去最高で、12月に入っても次々に低気圧が上陸しパリも雨が降らない日が珍しい。セーヌ川水位も徐々に上がり、10日(日)には2mを超えて2,75m~3mに達する気配である。11月からはセーヌ川増水期間に入るので当然と言えば当然だが、水量も増えて流れも速くなるこの時期、修復工事を待つ船「ルイズ・カトリーヌ号」(アジュール・フロタン)が気になる。メセナが決まらず工事ができないまま3年以上が過ぎて、来春こそはコンクリート躯体だけでも修復できることを願っている。

クリスマスを2週間後に控えてシャンゼリゼ通り、モンテーニュ通り、百貨店、商店街とイルミネーションが綺麗だが、雨ばかりでプレゼントを買って早足で帰宅する週末となった。年末年始の慌ただしさを避けて「ニコラ・ド・スタール回顧展」に行った。



ニコラ・ド・スタール(1914-1955)は1914年1月サント・ペテルスブルグの貴族の家庭に生まれる。1917年ロシア革命が勃発し危険を感じた一家は1919年ロシアを離れてベルギーに亡命する。1922年亡命先で両親を亡くし孤児となったニコラは養子となりベルギーで育ち、1933年ブリュッセルのボザールで絵画を学ぶ。ブリュッセルに長く留まることはなく、34年から南仏、スペインを回り、一年間モロッコを旅する間に女流画家ジャンヌ・ギョー(1909-1946)と出会い生活を共にする。

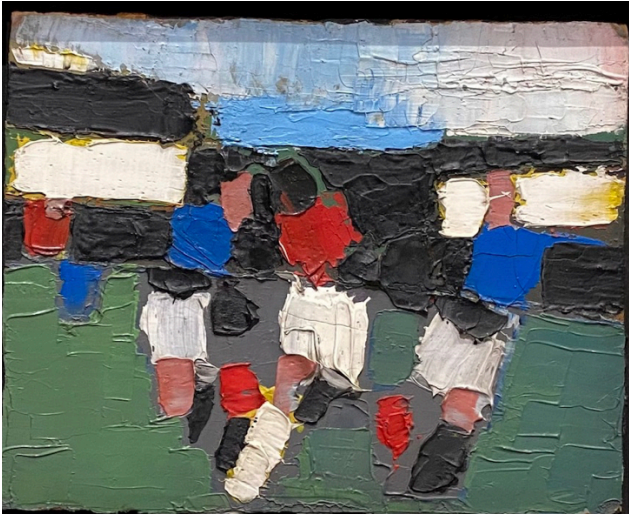
第一次世界大戦が勃発するとフランス外人部隊に入隊し、1940年からニース、1942年にはパリ14区にアトリエを持つ。ジャンヌと過ごした時期は抽象絵画が主流で、同じロシア人ワシリー・カンジンスキー(1866-1944)がパリで活躍していた。ド・スタールも貧困な中で試行錯誤を繰り返し意欲的に創作を行い、自身の抽象絵画を確立していった。1946年ジャンヌが流産から亡くなり、ド・スタールの下積み時代が終わる。

ジャンヌが亡くなった数ヶ月後フランソワーズ・シャプートン(1925-2012)と結婚し3人の子供が生まれ、1948年ニコラ・ド・スタールはフランスに帰化する。フランソワーズとの結婚を機に経済的に安定し

青の大きなコンポジション  
(1950-1951)



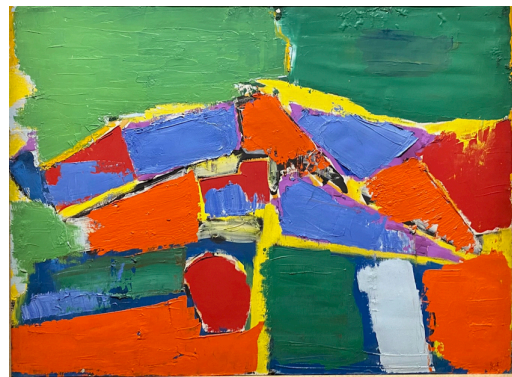
1950年頃からはこれまで暗かった画風に明るい色が配されるようになる。肉厚な色の層を重ねたコンポジションを繰り返し、画商(ジャック・デュブール)が付き、画家として名前も知られるようになる。



1952年にはパリのサッカースタジアムで観たフランス・スウェーデン戦を描いたり、イル・ド・フランス、南仏、ノルマンディーの風景と多くの作品を残した。

1953年、南仏プロヴァンスの眩しい太陽、暑い空気、輝く光との出会いで作品は鮮やかな赤、緑、黄色と一気に明るくなる。1953年にはメネルブ(プロヴァンス)にアトリエを購入する。そして1953年8月シシリア島に向けてイタリア旅行に出る。フランソワーズと

子供たちだけでなく、ルネ・シャールとその女友達も一緒だった。シシリアと題された作品は旅行からメネルブに戻って仕上げられ、画家の感受性を反映する緑、赤、黄色が眩しい。このシシリア旅行で一緒だった



ジャンヌ・ポルジュと恋愛関係になり、彼女と会うために1954年9月南仏アンティープにアトリエを借りる。そして翌1955年3月海に面したアトリエの屋根から飛び降り自殺をし41歳で生涯を閉じた。

幼くして祖国も両親も失ったニコラ・ド・スター

ル

にとって生きる拠り所は創作活動であったに違いない。そして創作活動は孤独で、彼を支えた女性、家庭、子供たちがいても満たされることはなかったのだろう。生まれた時から転々とし、絵を描くことで燃え尽きた人生だった。

20世紀ロシアからフランスに移り住んだ芸術家は多い。シャガール、ゴンチャロフ、カンジンスキーなどパリは多くの外国人芸術家を受け入れ、現代絵画に貢献している。他者を受け入れることで自国の文化を豊かにしてきたが、今日は移民問題に見られるように他者を許容することが難しくなっている。

「ニコラ・ド・スターール回顧展」はパリ市立近



代美術館で2024年1月21日まで開催している